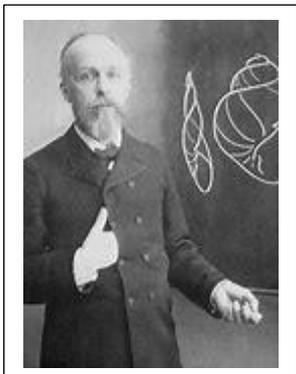


## エドワード・モースが見た江ノ島の人々



八柳 修之

エドワード・モース（1838～1925）、大森貝塚を発見した学者として知られ、中学の教科書にも出ている。日本の考古人類学の嚆矢とされているが考古学者ではない。モースはアメリカの動物学者で来日の目的は腕足類（サミセンガイなど）の研究のためであった。モースはイギリスに留学しダーウィンに師事し進化論を修め、帰国後、人類博物館長を務める傍ら腕足類の研究をしていたが、アメリカでは腕足類の収集に限界を感じ日本には 30～40 種類のもの腕足類が収集できることを知り、1877 年（明治 10）年に来日、東大のお雇外国人教授となり、日本に初めてダーウィンの進化論を紹介した。矢田部良吉教授から貝類の研究には江ノ島が良いとの勧めで島の東側の漁師の小屋を実験所とした。



エドワード・モース



江ノ島臨海実験所（モース画）



腕足類 サミセンガイ



モース記念碑 レリーフ



モース 臨海実験所跡推定地碑

江ノ島弁天橋を渡ると左側に観光案内所があり、前面の海側一帯は北緑地という広場、オリンピック記念噴水池、モース記念碑がある。石の台座には日本近代動物学発祥の地の銘板がある。また観光案内所内の一角に当時の島の人々の様子や風俗のパネルがあるので、覗いて見るとよい。モースの島での滞在は 7 月 21 日～8 月 28 日までの短い間であったが、

「日本その日その日」の中に島での生活の様子が次のように描かれている。

「旅につかれ、よごれた巡礼が、神社に参拝するために、島の頂上へ達する狭い路に一杯になっている。各旅籠屋では亭主から下女の末に至るまで、一人のこらず家の前に並び、低くお辞儀しながら、妙な泣くような声を出して客を引く。家々は島帝国のいたるところから来たな旅人達で充ち、三味線のチンチンと、芸者が奇妙なつくり声で歌う音とは夜を安息の時にしない。この狭い混みあう路を通して、私は実験所へ往復する。

私はこの村における唯一の外国人なので、自然彼らの多くの興味を引くことが大である。

・・・(略)・・・しかし私は誰からも、丁寧に、かつ親切に扱われ、私に向かって叫ぶ者もなければ、無遠慮に見つめる者もない。この行為と日本人なり支那人なりが、その国の服装をして我が国の村の路、都会の道路でさえも行くときに受けるであろうところの経験とも比較すると、誠に穴にでも入りたい気持ちがある。これらの群衆は面白いことをしに出て来たのだから、恐ろしく陽気な人達も多いが、酔っ払いはたった一人見ただけである。彼は路傍に静かに眠っていた。人々は悲しげにその状態を見て通り、嘲笑する子供などは只の一人もいなかった。このような場合が、私をして二つに文明を心中で比較させ続ける。 (E・モース著 「日本その日その日」(石川欣一訳))

モースの目に映った江ノ島の人々の姿の印象である。日本人を好意的な目で観察されている。

モースが「日本その日その日」の中の日本人について、述べている箇所を摘記する。

「汽車に間に合わせるためには、大いに急がねばならなかったもので、途中、私の人力車が前を行く人力車の甑(こしき：車の輪の中心の丸い部分)にぶつかった。車夫はお互いに邪魔したことを微笑で笑いあっただけで走り続けた。私は即刻この行為をわが国でこのような場合に必ず起こる罵詈雑言と比較した」

「何度となく人力車に乗っている間に、私は車夫が如何に注意深く、道路にいる猫や犬や鶏を避けるかに気が付いた。また今までのところ、動物に対して癩癩を起したり、虐待したりするのは見たことがない。また小言を言う大人もない」

「私は日本が子供の天国であることを繰り替えさざるを得ない。世界中で日本ほど子供が親切に取り扱われ、その子供のために深い注意が払われている国はない。ニコニコしているところから判断していると子供達は朝から晩まで幸福であるらしい」

「鍵がかけられぬ部屋の机の上に、私は小袋を置いたままにするのだが、日本人の子供や女中には一日に数十回出入りしても、触っていけない物には決して手を触れない」

「田舎に行くと、端正な生垣や掃き清められた道は目を見張り、子供が破った障子を花卉

型に切り抜いて張る芸術性にうなった」「美德や品性を日本人は生まれながらにして持っている」

「衣服の簡素、家庭の整理、周囲の清潔、自然まですべての自然物に対する愛、あっさりして魅力に富む芸術、挙動の礼儀正しさ、他人の感情に対しての思いやり・・・これらは恵まれた階級の人々にばかりではなく、最も貧しい人々も持っている特質である」

「この地球上で日本人ほど自然と生きものを愛する国民はいない。日本は「微笑みの国」である」

モースが来日してから半世紀半、昔々の日本人は礼儀正しさ、自然に対する愛、他人に対する思いやり、美しい日本であった。

参考・引用図書：(E・モース著 「日本その日その日」(石川欣一訳) 講談社「学術文庫」  
ウィキペディア 無料画像 「藤沢の文学」北沢端史 藤沢文庫